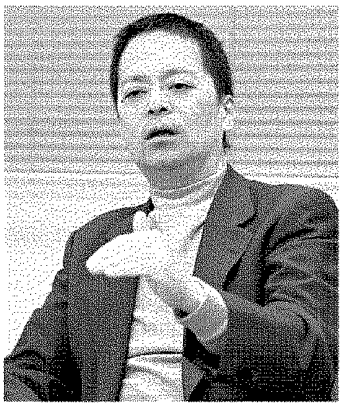
掲載日:2013年04月27日，面名:オピ１，記事ID:KIJ20130427_M002900100CP02001
(C)新潟日報社

特別編集委員の目

福の神が招いた不幸

田中元首相

新潟国際情報大教授
越智 敏夫



おち・としお　1961年愛媛県生まれ。立教大学法学部卒。慶応大学大学院政治学博士課程修了。96年、新潟国際情報大学講師。2006年に教授。専門は現代政治理論。

これまでずっと書こうと思いながら機会を逸してきたテーマがある。田中角栄元首相である。もちろん全体的評価など短文では無理だ。そこで本稿では現在の新潟政治への影響についてのみ考えたい。

それは彼の巨大な存在感のために本県で生じた不幸、特に市民の政治家評価に関わる二つの問題である。

まず第一の問題は、政治家の優劣が判断される際、地域にもたらす経済的利益のみが基準とされてきた点である。

田中の個人的魅力が強烈だったこともあるだろうが、これでは代表として自分たちと同質な人間であるはずの政治家を、なにか特別な「福の神」のように思いこんでしまうことになる。

しかし政治家の評価の基準としては「何を与えてくれるか」という利益誘導以外の観点があってよいはずだ。たとえば社会内の新たな問題をすばやく見つけ、その解決方法について市民とともに議論するような姿勢をもつ政治家だって存在していい。

また社会内の少数者の利益は多数派の利益と劇的に対立することもあると地味に訴えていく政治家だって必要だろう。しかしそんな政治家は田中に比べるとまどろっこしく見えるのだろう。

現代のように複雑な社会では、ある政策によって全市民が一律の利益を得ることなどすでに不可能である。誰かが得をした瞬間、それは他の誰かの利益を奪う。

そうした例としてはTPPなどを持ち出すまでもなく、まさに田中によって建設された柏崎刈羽原発という巨大プロジェクトの現状を見れば明らかだろう。環境と産業という二種類の利益の共存は困難なのだ。

ところがこうした複雑な事態にもかかわらず、政治家の評価が利益誘導のみという粗雑な理屈のみで行われるようになった。本来、政治家の能力はより複合的に判断されるべきにもかかわらずである。

第二の問題はより単純である。新潟県民は政治家を評価する際に田中を基準にしてきたため、甘い見方が横行してしまった。

普通、田中を基準にしたら他の者に対しては厳しい見方が増えると思われがちだが、そうではない。記憶のなかの田中の存在があまりに別格なため、同じ基準を求めるのは酷だとなり、他の政治家には大きな期待などしなくなった。

私から見れば、いくらなんでもこれはひどいという変節をした政治家でも、けっこう平気で生き残っている。また政治家立案の政策がうまくいかなくても、それを彼らの無能さゆえと批判するのではなく、状況的な変化を理由に許してしまう。

田中本人に対してさえ、彼の政権の末路や派閥の衰退について、「ロッキード事件さえなければうまくいっていたはず」と本気で思いこんでいる人は多そうだ。

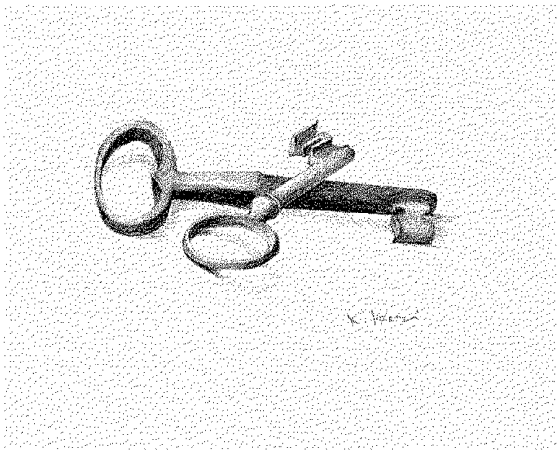
以上、二つの理由から新潟県民は政治家への許容度が高くなった。彼らを利益誘導という単純な基準以外で評価せず、その唯一の基準さえ甘くなったのだから当然である。

こうして新潟の政治家は新旧、保革を問わず、とんでもなく楽な立場を手にしたのである。つまりどんなことをしてもしなくても、「角さんじゃないから」と許されることになった。

このところ新潟の政治家が言い訳をしている光景を見ることが多い気がする。それは換言すれば、言い訳だけして失敗の責任を取らないということだ。

市民も政治家にやさしすぎる。まるで連敗続きのときのアルビレックスとサポーターの関係である。サッカーならまだしも、政治においては不幸である。

これが田中角栄が新潟におよぼした最大の災厄である。



絵・堀 鍵 研一